

# 井戸に捧げられた馬



時代：古墳時代中期

調査名：唐古・鍵遺跡 第59次調査

発見年：1996年

馬は飼育や乗馬の技術とともに大陸から渡来し、古墳時代中期にはその利用が普及しました。古墳時代の馬は、労働力としてだけでなく、軍馬や威信財としての役割も担いました。『日本書紀』  
允恭天皇<sup>いんぎょう</sup>42年11月に、「倭飼部」<sup>やまとのうまかいべ</sup>が登場することから、古墳時代の奈良盆地に馬飼い集団がいたと考えられます。

唐古・鍵遺跡で見つかった馬の骨は、頭部・胴部・四肢の一部ですが、歯の磨り減り方や骨の大きさから、この馬は4～5歳で、<sup>ひづめ</sup>蹄から肩までの高さが135～140cmということが明らかになりました。現代の競争馬と比べれば、小さな馬のように思われますが、古墳時代では体格がよく、成長した働き盛りの馬でした。さらに、馬の骨は、一辺40cm程度の正方形の範囲に集積していることから、解体された骨だけが木製などの腐食しやすい容器に入れられていたのでしょう。

この馬の骨は、唐古池の東側の調査地から出土したもので、大形の井戸の最上層に埋納されたようです。この井戸からは、木製の腰掛け<sup>たも</sup>や手網、田下駄<sup>もくすい</sup>、木錘、須恵器の壺<sup>こしき</sup>や甑、土師器の壺や甕、高坏などが出土しており、これら遺物で構成されるマツリを想定できるかもしれません。

